

日本の幼年童話 25

山のなかまたち

早船 ちよ・作
箕田源二郎・絵



岩崎書店

日本の幼年童話25

山のなかまたち

早船ちよ・作

岩崎書店 1980

114P 21 cm / NDC 913

日本の幼年童話25

山のなかまたち

1976年9月30日 第1刷発行

1980年2月25日 第4刷発行

著者 / 早船ちよ

発行者 / 森山甲雄

発行所 / 岩崎書店

東京都文京区水道 1-9-2 〒112

電話 03・812・9131

振替 東京 7-96822

活版印刷 / 第一印刷株式会社

オフセット印刷 / 清水印刷紙工株式会社

製本 / 小高製本工業株式会社

© Chiyo Hayahune, 1976

(分)8393(製)512576(出)0360

早船ちよ・作
箕田源二郎・絵

山のなかまたち

日本の幼年童話 25
岩崎書店



日本の幼年童話

25

山のなかまたち

もくじ

出た！ ツキノワグマ……………5

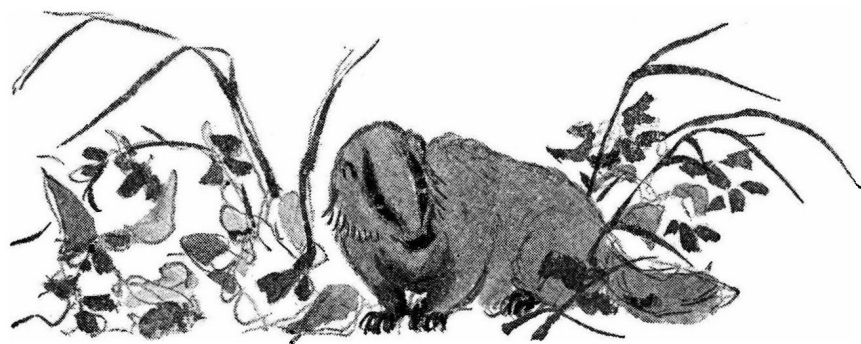
虹よ、かかれ

——タンチヨウヅルの村へ……………23

イノシシ風が吹く……………43

キジのはなし三つ……………57

雪ウサギおどれ……………73



冬^{ふゆ}ごもりのなかまたち……………95

解説^{かいせつ}|| 作家^{さつか}と作品^{さくひん}について……………来栖^{くるす}良夫^{よしお}

装帧|| 宫川源太郎

表紙・口絵・さし絵|| 箕田源二郎



読者のみなさんへ

このシリーズ『日本の幼年童話』は、日本の近代、現代の創作童話のなかから、小学校初級～中級程度の読者を対象に、現代の子どもに興味をひき、児童文学として朽ちない生命をもつ作品を精選して、おもに作家別に編集したシリーズです。

幼年童話という形式や枠にとらわれず、作品の質を第一に、広い範囲から自由な作品選択をおこなったところに、このシリーズの特色があります。父母・教師のかたたちにも、あわせてご愛読をえられれば幸いです。

編集委員

菅 忠道／関 英雄

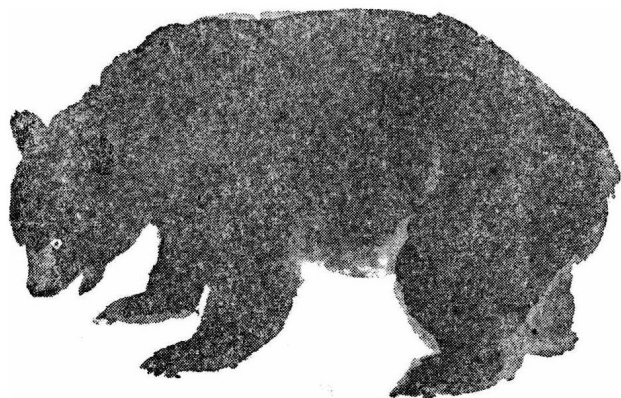
作者紹介

早船ちよ（はやふね・ちよ）

1914年、高山市に生まれる。
1962年、『キューポラのある街』で日本児童文学者協会賞、『ボンのヒッチハイク』でサンケイ児童出版文化賞をうける。
作品には、『峠』『湖』『街』の三部作、『いさごむしのよっ子ちゃん』『春のシュトルム』、世界の民話『アハメッドの旅』など五部作、『わたしの飛驒』ほかがある。
「子ども世界」児童文化の会、「新作家」協会、日本児童文学者協会、民主文学同盟会員。

出^で
た
!

ツ
キ
ノ
ワ
グ
マ



春^{はる}グマは 氣^きがあらゐぞ

朝礼^{ちようれい}のときです。

「おうーい、みんなあ！ クマがでてくるはなし、きいたかあ」

じいさま先生^{せんせい}が、どらごえできます。

ケヤキ平分校^{だいへいぶんこう}の生徒^{せいと}たちは、一年生^{ねんせい}から六年生^{ねんせい}まで、ぜんぶで、二十人^{にん}ぐらい。げんきよく、手^てをあげます。

「はあい、はあい！」

「せんせ、せんせ。ツキノワグマが役場^{やくば}まえの川^{かわ}で、立ちしょんべんしとった——と、ヘイザエムいんきよが、いいよおりました」

「やくたいもない（あほらしい）！」

じいさま先生^{せんせい}は、しかめがおを、した。

「せんせ、せんせ。ツキノワグマが、すすきつ原^{はら}のさきの川^{かわ}原^{はら}へいくのをみたって——。サンペイおじが、いいました」

五年生^{ねんせい}のミイコが、いった。

「ほんとかあ？　ミイ子^こ」

「ほんとですき、せんせ」

ミイ子のおとうと、三年生^{ねんせい}のトシオが、口^{くち}をとんがらせます。

「すすきつ原^{はら}さきの野天^{のてん}ぶろでなあ、おや子^このクマが、湯^ゆあびをしよ
つたって……ほんとやぜ」

みんなが、どっと、わらいます。

「しずかに――、こら、ぎょうぎよくせんか」

先生^{せんせい}は、みんなを、ひとわたり見^みて、

「クマは、ちかごろ、めったに出^でんようになった」

すると、みんなは、ふへいそうに、はなをならしたり、「うそ、う
そ」と、ささやいたりします。先生^{せんせい}は、いっこう、かまわずに、

「そうじゃ。村^{むら}へバスが一日^{いちにち}に二かい、やってくるようになったでな
あ。バスは、クマより大^{おお}きいし、足^{あし}も早^{はや}い。でかい音^{おと}たてて、くさいへ、

をこく。それでクマは、めった、出でこんようになつた。それでも、

このへんの山やまにおらんようになつたわけではない」

先生せんせいは、このノリクラ岳だけのふもとや峠とうげにすむクマ、北西部ほくせいぶの白山山はくさんさん岳地帯がくちたいに数百頭すうひゃうとうもいるツキノワグマ、日本内地にっぽんないちのあっちこちの山地さんちでくらしているツキノワグマの話はなしをします。

日本産にっぽんさんのクロクマは、のどくびに、三日月みかづきがたの白しろい毛けがあるの
で、ツキノワグマとよんでいます。重おもさは、七、八十キロから百キロ
をこすのもあります。ツキノワグマのめすは、二、三月がつごろ、冬ふゆごもり
の穴あなのなかで、一、二ひきの子こをうみます。

「ツキノワグマは、雪ゆきどけごろに穴あなからでると、谷たにのサワガニやら、
フキノトウなんかをくって、もりもり、力ちからをつけるんじや」

と、先生せんせいはいいいます。

「子こづれの春はるのクマは、気きがあらいぞ」

このあいだも、りょうしのツネさんがクマうちにいって、しりの肉にく



9 出た！ ツキノワグマ

をひっかかれたのでした。

「いいか、みんな。クマは、ほんとうは、気が小さいでな。ふいにてあった、よんどころないときでないと、かかってこん。しかし、みちのまがりかどや岩かどなんかで、ばったり出あうと、なぐりかかる」
みんなは、息をつめてきいています。

「きょうから、学校の行きかえりには、ひとり歩きをするな。おうぜいのなかまで、でかいこえでうたったり、しゃべったりしていけ」
そのこえをきくと、クマのほうで用心して、ちかよってこないといいます。

その日、ミイ子たちは、ホーム・ルームの時間に、こどもたちだけで、もういちど、クマのもんだいを、はなしあいました。

家から、ケヤキ平分校まで、いちばん近いミイ子とトシオ姉弟でさえ、四キロの林道をおとてきます。ちびのシンちゃんなど、二年生なのに、十キロちかい山道があるくのため、たいへんです。

——春^{はる}のクマを、おこらせんように。

——クマに、かかってこられんように。

トシオが、すばらしいかんがえを^{はつびよう}発表しました。

みんな、よろこんで、さんせい。

さっそく、あすのあさから^{じつこう}実行と、きまりました。

クマと人間^{にんげん}のしろとり

あくるあさ。

ミイ子^ことトシオは、シラビソの森^{もり}の入り口^{ぐち}で、モモ子^こやシゲルくんらと、おちあいました。

みんなは、ホーム・ルームでやくそくしたとおり、こしにつけたなわに、カンヅメのあきかんを、二つ以上^{じょう}もむすびつけています。

あるくたびに、あきかんは、カランカラン、ガラングラン、けいきのよい音^{おと}をたてます。



「えっへん、どうです。クマのやつ、びっくりこいて出てこれんぞう」

トシオは、とくいになって、いちばん前をいきます。

「そうよ、そうよ。クーマ、クマさん、おいでんさい」

モモ子が、なわとび歌をうたいたすと、ほかのみんなも、けいきよく、

「いっちょ、にちよ、さーんちよ！ クーマ、クマさん、まわれみぎ」

ガラガラガラ、



カラカラカラン！

げんきよく、あるいていく。ツガとシラカンバの林^{はやし}へさしかかったとき、せんとうのトシオが、はつと、立^たちすくみます。

「おうーりよ！ クマあ……でた。でてきたぞ」

まえをゆびさすなり、ぺたんと、しりもちをつきました。みると、もやがかかっているシラカンバ^{ばやし}林の十メートルさきに、くろいかげが手^てをあげて、ぬつと立^たっています。

「わあーっ、ク、クマじゃあ」

トシオが、くるりと後ろを向いて、ころびそうになかったこうで、にげだします。

「きゃーっ！」と、モモ子^なが泣きます。

「にげろ！ にげるんだ」

シゲルくんは、むりやりに、モモ子^この手^てをひっぱります。ミイ子^この足^{あし}へ、シンちゃんのカンのひもがからんで、シンちゃんが、

「こわい、こわい」

と、泣^なきだす。そのひもを、ミイ子^こがはずそうとして、しゃがんだとき、もやのなかのくろいかげが、はしっておいけてきます。

「だめだわ、やられる」

クマが、本^{ほん}気^きになっておいかけくると、おとなのりょうしのサンペイおじでもかないません。

——やられる、やられる。

ミイ子^こが、あわてて、ひもといて、「さ、しんちゃん」と、手^てを

